

本冊子『インクルーシブ社会研究』第5号は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「インクルーシブ社会に向けた支援の〈学＝実〉連環型研究」プロジェクト、テーマ⑤社会的包摂と支援に関する基礎的研究の研究成果です。連続セミナーの趣旨については「まえがき」を参照いただければと思いますので、ここでは基礎的研究と〈学＝実〉連環について記しておきたいと思っています。

「インクルーシブ社会に向けた支援の〈学＝実〉連環型研究」プロジェクトは、次の5つのチームによって構成されています。

- テーマ① 対人支援における〈学＝実〉連環型（トランスレーショナル）研究の方法論
- テーマ② 社会的包摂に向けた予見的支援の研究
- テーマ③ 社会的包摂に向けた伴走的支援の研究
- テーマ④ 社会的包摂に向けた修復的支援の研究
- テーマ⑤ 社会的包摂と支援に関する基礎的研究

プロジェクト全体の「末尾」にあたる⑤基礎的研究は、それぞれの方法論・予見的支援・伴走的支援・修復的支援を反省的にとらえ、〈学＝実〉連環という営みの内実をよく「観察」し、全体の目的・機能、そして各アクターの変化に着目し、そこから立ち上がる「連携の倫理」について考究することにあります（小泉義之「社会的包摂と支援に関する基礎的研究」『インクルーシブ社会研究』第3号）。本冊子からも、「障害者権利条約」「障害者差別解消法」における政策策定へのアクター参画の実際と課題、福祉の対象と自立をめぐる「支援」主体の問題、理念として基本法と差別解消法の関係や条例における「上乗せ横出し」といった法と政策の枠組みについての課題や経過を見出すことができるかと思います。「障害者権利条約」「障害者差別解消法」は新たな社会のあり方を示す活動のひとつであり、今回掲載した第1回目から第3回目までは「導入」としての位置づけを色濃くもちます。ここでなされた議論は、これからの

〈学＝実〉連環を考えるうえで（文字通りの）基礎となる内容です。本冊子をもとに、「支援」や「インクルーシブ社会」のあり方、そして〈学＝実〉連環における連携の倫理について——ミネルヴァの梟よりは密着し／連環する「尾」として——考究するためのひとつの礎となることを願っています。

最後になりますが、本連続セミナー、とくに第1回目から第3回目の開催と本報告書の刊行については、講演者のみなさまはもちろんのこと、本学生存学研究センター客員研究員である青木千帆子さん、本学大学院先端総合学術研究科院生である権藤眞由美さん、本学衣笠総合研究機構（生存学研究センター所属）専門研究員であるクァク・ジョンナンさん、熊本学園大学水俣学研究センターのみなさま、本学リサーチオフィスの野村慶人さん、村山育代さん、片山詩朗さんからの多大なるご助力がなければ実現はかないませんでした。この場を借りて、お礼を申し上げます。

立命館大学衣笠総合研究機構

渡辺 克典